

音信不通

本のビオトープ

学びあう人々のために

2024. 10. 10 定有堂書店 発行

この世の業の能わざるなり

奈良 敏行

「本のある場所」日記 二〇二四年九月

南陀楼綾繁

陸の哲学、海の哲学―洋上での「転向

岩田 直樹

無駄を繰り返す生き物として

木元 健二

「学び系」の誘惑

丸 祐一

『町の本屋という物語』読書会(8)

松田 裕史

川辺へ、そして川辺から

白井 明大

人間がかく日記

鳥居 貴彦

「リーチ先生」を読む

山下 篤美

Tutti Frutti

高木 善祥

本を作る側、売る側、届ける側のお話

村瀬 謙介

汽水のほとりから(43)

小原 修治

私「鳥取市美術館」の味方です

萩原 俊郎

ゲンジものごたり

ムラカミヒロミ

鳥取あれこれ その九十八

内田 克彦

内坪井町日記

(5)

齊藤 仁昭

あなたも私もちりばめられて

三浦 永理

いも(くり) なんきん

あきの素生

白井明大さんのこと

奈良 敏行

ききね」

ドラマメリア

…… 編集後記

この世の業の能わざるなり

奈良 敏行

(定有堂 主人)

いまは品切だが、河出書房新社から出ていた「シュルレアリスムと画家叢書」の中に『イヴ・タンギー』画集がある。八木書店のバーゲン本の中にあつたので、定有堂では常備していた。もともとは自分が気になつていたので、いつか開いて見たいという気持ちがあり、置き続けた。しかし開いてみる機会はなく、すれ違いに終わった。いまでは古書価も高く手にすることもできない。

夜眠りにつくとき、よく宇宙の果てに思いを馳せる。暗黒の中にポツカリ浮かぶ地球、そこにはすべてがあるのに、その外には何も無い。地球にある豊富な彩りも、元はとい

えば星屑由来だ。そして永遠の未来、そんな地球も消え失せてしまふ。二十代の頃もよくそんなことを考えていた。最近あらためてこの世の不思議をしみじみ思う。この風景に響く言葉もあった。堀田善衛の『美しきもの見し人は』という本から知った。

《美はしきもの見し人ははや死の手にぞわたされつゝ世のいそしみにかなはねばされど死を見てふるふべし美はしきもの見し人は》

この詩の一節のどこに感動したのだろう。たぶん「世のいそしみにかなはねば」の部分だろうか。別の訳で「この世の業の能わざるなり」というのがあったよ、と教えてくれる人がいた。ここでは「この世の因果関係に適應していない」という意味が強くなる。

タンギーの作品にあったのか、それとも印象としてそう思ったのか、タンギーの絵画を想うと、いつも「誰もわたしを知らないという」という「ことば」が浮かんでくる。無機質なのだが、なぜか有機的な気配を漂わせる絵画世界なのだ。この絵画と詩には「この世の因果関係」を砕く何かがある。

「死を見てふるふ」という駆動性は何だろう。わたしは共に生きてきたなじみ深いオブセッションのことを（こ）でも語っているに過ぎない。

なぜ本を読みつづけるか、それは常に「この世の業の能わざるなり」というさきやきが聞こえるからだ。本だけがわたしを救済する他者だったと今も思う。最近とてもわかりやすい、ラカンについての本に出合った。『ゼロから始めるジャック・ラカン』片岡一竹だ。

《〈同じようなこと〉の反復から抜け出すためにはどうしたらよいのでしょうか？》

《そこから脱出するために大きな役に立つのは、決して共感しないような他者がいることです。》

そうか、共感するような「本」ばかり読んでいてはダメなのかと、問いを小さく縮減してみる。身の丈に合わせるのだ。オブセッションも「反復」なのだ。そして「愛の不毛」についても記してあった。

《愛は欲望という本質的な不満足を追い越して無限なものを求め、だから挫折を余儀なくされるのです。》

ラカンは「欲望」を「要請」へと還元するところには救いはないと言っているらしい。自分の欠損を補ってくれと、他者に「要請」してもそれは土台無理な話だということらしい。

救いを求めて本を読んできたのだろうか。もう一つ感動する本があった。東畑開人『野の医者』だ。臨床心理士の成長物語だ。

《治療者になるためには、一度病者にならないといけない。あるいは、病者が治療者になる。人間は病み傷つくことで、人を癒やす力を手に入れる》

まったくそうだと思った。ところで、本を売る人は本に救われた人でなければいけないのだろうか。必ずしもそんな必要はないが、その系譜にわたしも属したいものだと思った。「欲望」を「要請」へと還元して傷つく人を救いたい。本の力で……。

東畑はこんなこともさりげなく言っている。

《まず心のブロックを外す。すると自分の考え方が変わる。結果ミラクルなことに、世界が変わっていく。》

これが東畑流救済の姿だ。ラカンの言っていることも単純化すれば同じことだと思った。

イヴ・タンギーの無機質だが有機的な絵画を見ていると、時空の際(きわ)にもう一つ時空が接しているようにも感じる。「この世の因果関係」に割れ目ができて、そしてその意味がたち切られる。虚空を描くタンギーの風景が何年たつても忘れられない。「反復」するものがあるのだろう。私的なオブセッションの「風景」と「ことば」を、出合いのままに記してみた。

024. 09. 21

(参考)

ダニエル・マルシエッソー 飯島耕一 『イヴ・タンギー』

河出書房新社 1978

堀田善衛 『美しきもの見し人は』 新潮文庫 1983

片岡一竹 『ゼロから始めるジャック・ラカン』ちくま文庫 2023

東畑開人 『野の医者は笑う』 文春文庫 2023

奈良敏行+三砂慶明

『町の本屋という物語―定有堂書店の43年』

作品社 本体2200円 46判上製

ISBN978-4-86793-013-7

発行 2024. 2



「本のある場所」日記 二〇二四年九月

南陀楼綾繁

(ライター・編集者)

9月20日

朝4時起きで羽田空港へ。6時45分発の飛行機で新千歳空港。南千歳で特急に乗り換えるが、今年春から自由席が廃止され、全車指定席になっていた。しかも、室蘭は交通系ICが使えず、車内で精算しなければならぬ。車掌が不機嫌そうに説明するが、乗るまでどこにも告知が出てなかったんだから仕方ないでしょう。

室蘭駅で東海法夫さんが出迎えてくれる。秋田市で私設図書館〈本庫〉を運営する天雲成津子さんと一緒に、東海さんの運転で室蘭市図書館へ。元館長で『本の話』（室蘭民報社）の著者である山下敏明さんと会う。

遡ること23年。古本情報誌『彷彿月刊』の連載で、ネットで見つけた山下さんの「本の話」（単行本になる前）を紹介した際に手紙でやり取りしたが、お会いすることはなかった。それが、今年1月に秋田市で〈本庫〉に行った際、山下さんが室蘭工業大学の図書館にいたときの学生だった

西方里見さんと妻の耿子さんに出会い、それがきっかけで室蘭を訪れることになったのだ。

山下さんは図書館内に「ふくろう文庫」というコーナーを持ち、市民から寄贈された資金で美術関係の資料を購入している。書庫を見学し、夜は居酒屋でみなさんと飲む。泊まった室蘭プリンスホテルは百貨店だった建物で、部屋がゆったりと広く、朝食も美味しかった。

9月21日

朝、港の文学館を見学。室蘭は八木義徳、三浦清宏、長嶋有の3人の芥川賞作家を輩出しており、その展示が充実している。雑誌の創刊号などが並ぶ〈田中秀痴庵文庫〉の棚にも感動する。測量山にある八木義徳の文学碑や円形校舎が特徴的な旧絵鞆小学校を見る。

午後は室蘭市図書館で山下敏明さんと私のトーク。40人以上が集まり、話も盛り上がりつつよかった。しかし、取材に来た北海道新聞の記者が出演者に会おうとせず、承諾も得ず勝手に記事を掲載したことに釈然とせず。一言声を掛ければすむ話なのにねえ。

喫茶店〈英国館〉に入る。女性の店主で、常連客が多い。雰囲気がよくコーヒーマイルも美味いが、全員タバコを吸うので空気は悪い。久しぶりに頭が痛くなった。

9月22日

朝、室蘭駅から出発。10月から無人駅になるそうだ。

札幌コンベンションセンターで「文学フリマ札幌」を見る。ブースが増えすぎた東京と違い、1時間で回り切れるちょうどよい規模。道内から参加のブースは、旭川の三浦綾子記念館や手書きの郷土史フリーペーパー『測量山通信』など面白い。東京から参加の知り合いが多い。大学の後輩で中東の文化を紹介する「カフェバグダッド」の久保健一くんや、不忍ブックストリートの一箱古本市にも出た「しらい弁当」さんも出店している。

夕方、幌平橋駅から歩き、札幌南高校近くのへ田錐書店へ。文学、美術、郷土史などが充実した棚から何冊も買いたくなって困る。18時からトークイベント「アンソロジーを読む、アンソロジーを編む」開催。15人参加で満席。私のアンソロジー読書歴や新刊『中央線随筆傑作選』（中公文庫）を編む際の裏話など。話しているうちにいろいろ思いついてきて、ライブ感があるトークになった気がする。店主の福田さん、客の積読荘の住人さん、久保くん、しらい弁当さんと居酒屋へ。カスベのザンギなど食べつつ、本の話で終電間際まで。

9月23日

ゲストハウスの2階ベッドで早く目覚めてしまい、6時に出て札幌駅へ。スタバのイトインで時間つぶし、小樽に向かう。レンタサイクルで小樽市総合博物館の本館と運河館。運河を自転車で走ると風が心地よい。小樽文学館との3館共同開催「伊藤整の『幽鬼の街』展」が素晴らしい。文学館で元館長の玉川薫さんと再会。隅々まで取材させてもらう。

15時に終わって、〈ニュー三幸〉で生ビールとカツカレー。教えてもらった古本屋は2軒とも休み。夜は駅近辺で刺身など買って、ホテルで食べる。

9月24日

7時半に小樽を出て札幌へ。パルコ近くの地下の喫茶店〈ひので〉でモーニング。サンドイッチ美味い。出版社「垂璃西社」で取材。社主の和田由美さんは1970年代の『ステージガイド札幌』から独立し、35年以上、同社を続けている伝説の編集者。和田さん、編集の井上哲さんとスーパークレーの店へ。旨い。

この後も取材は続くが、字数尽きたのでこゝまで。

陸の哲学、海の哲学―洋上での「転向」(一〇、完)

岩田 直樹(公立鳥取環境大学特任教授・「読む会」講師)

八 陸に上がる

一〇回シリーズの拙稿は今回で完結する。第九回まで読み返してみると、脈絡もない話が続き、駄文であることは明らかだ。もつともまく書けなかったものか。面白いエピソードはあつたはずだ。

世界最深处(マリアナ海溝チャレンジャー海淵、深さ一〇九四メートル)の真上を通過したときの一種独特な感動は忘れられない、五千メートルの海底に前年設置した地震計を回収する困難な作業(位置を誤差数十センチで確定しなければならぬ)、地球史を物語る海底を何百メートルもボーリングして柱状コアを採取する地道な作業、等々。私は後部甲板で眺めているだけであつたが、その緊迫感は一ひしと伝わってきた。

四五日間の調査船での生活を終えた私たちは、出航した晴海埠頭に帰った。最終日は羽田沖に停泊。日没前後、二、三分おきに空港を弁着する機影はとても美しかった。

レヴィイストロースは、学術書ゆえにゴンクール賞を

受賞できなかったと言われる名著『悲しき熱帯』を次のように書き出す。「私は旅や探検家が嫌いだ。それなのに、いま私はこうして自分の探検旅行のことを語ろうとしている。だが、そう心を決めるまでにどれだけ時間がかかったことか！私が最後にブラジルを去ってから十五年が過ぎた」(原著一九六二年、中公クラシックス『悲しき熱帯I』二〇〇一年、川田順造訳、四頁)。

レヴィイストロースを引き合いに出すのは甚だおこがましいのだが、私もまた旅や探検に興味はなかつた。船上体験は、私をインドア派からアウトドア派へと変えた。そして何よりも、海に対する見方が劇的に変わった。

私は海の近くで生まれ育つた。海は陸から見ただけであつた。海から見た陸。その光景に魅せられた。その後、機会(暇とお金)があれば、頑張つてもせいぜい二、三年に一回のペースでしかないが、長距離フェリーを移動手段に組み込もうとしている。岬・灯台めぐりも始めた。岬は陸の「終わりの地」であると同時に、陸の「はじまりの地」でもある。北海道最北端から九州最南端まで、日本中を車で走り回つた。

八月「読む会」の後だったか、県民文化会館の会議室(定有堂書店閉店後の「読む会」会場)で、奈良さんか

ら「連載稿の次は何を書くのですか」と尋ねられた。私は何も考えていなかった。急に思いもかけない質問を受ける。「陸の哲学とか海の哲学ってあるのですか」と。答えに窮した私は「うーん、どうですかね」と言葉を濁すしかない。それ以来、一ヶ月ほど「陸の哲学、海の哲学」が気になって仕方がない。

例年九月、翌年の「読む会」テキストを選定する。原則として過去一年間に刊行された新書・文庫である。定有堂書店が「遅れて売る」方針を堅持したように、「読む会」は「遅れて読む」。

専門書は値段が高い。前提の知識が要る。その点、新書や文庫はちょうどいい。しかし、内容が薄っぺらだと、いくら速読したとしても読む時間が無駄になる。選書はなかなか悩ましい。そこで参加者から推薦してもらうことにした。二〇〇八年に本をまとめて提示する方式を採用して以来、初めての試みである。

東浩紀『訂正する力』（朝日新書、二〇二三年）を読みたい、という声が上がった。『訂正する力』を含めて、東の他の本を読んでみることにする。私はデビュー作『存在論的、郵便的―ジャック・デリダについて』（新潮社、一九九八年）しか読んでいない。今回読んだ『訂正する力』、東思想の方向性が明確に打ち出されている『観光

客の哲学 増補版』『訂正可能性の哲学』（いずれもゲンロン、二〇二三年）の内容についてここでは触れない。

東は「友と敵」「例外状況」概念によってナチズムに理論的に加担したカール・シュミット（一八八八―一九八五）を批判して「観光客の哲学」を提唱する。「ああ、そうだった」と思い出したのが、シュミットが戦後に「陸と海」の政治哲学―大陸国家と海洋国家の戦略的な差異―を展開したことだった（蔭山宏『カール・シュミット―ナチスと例外状況の政治学』中公新書、二〇二二年、「読む会」第二期第二七四回、通算第三八九回）。シュミットはハイデガー以上に胡散臭い。とはいえ、陸からではなく海から政治哲学を論じようとする視点気は否定すべきではなからう。「海の哲学」は存在するのだろうか。私が今までに接してきた現象学、公共性の哲学などは「陸の哲学」である。

「海」派に近いのは、「生の飛躍（エラン・ヴィタール）」による「創造的進化」を唱えたベルクソン哲学かも知れないが、「海」派寄りの「陸」派だろう。ベルクソン系列？のドウルーズも「戦争機械」「ノマド」などの概念を見る限りは「陸」派だ。

「海の哲学」を探してみたい。次回以降の構想を全く思いつかない中、そんなことを考えている。

無駄を繰り返す生き物として

木元 健二

(新聞記者)

銭湯の湯船につかるだけでは物足りない。手と足を伸ばし、高い天井に向かい、「あ〜」という声をもらさねば、どうも疲れがとれない気がする。誰かがそんな楽しい話を書いていた。

そうだよなあ、と感じ入り、東京の下町で暮らしていた頃、毎晩のように実践したものだ。銭湯にゆく、という当たり前のことのなかにも、そうした機微がある。

そんな風にふと読んだ一文に引き込まれ、すこし日々の過ごし方が変わることもある。

あと別段、本でなくとも、たまたま観た映画でも舞台でもいいのだが、追っている話が進んでゆくのがいかに惜しい。おしまいに近づいてゆくの、なんとも惜しくなることがあるものだ。

瀬戸内寂聴『場所』は、そんな稀有な小説だと思う。父、母それぞれの故郷にまつわる追憶、夫と娘を捨てて出奔し

た駅、作家としての出発点となった地……吹き荒れる風雨を乗り越え、独り、作家として生き抜いた瀬戸内が八十歳にして再訪し、物語として織りなされる。私小説ならではの凄みが、これでもか、と迫ってくる。

スマホで読める電子書籍で読んだのだが、余韻の良さから、リアル書籍も買ってしまった。電子書籍には鮮明な線を引いているし、いつでも読み返せる。なのに新潮文庫の一冊を手にしたくなった。アナログ人間ゆえなのだろう。

すこし古くなった一眼レフカメラから、近頃、ミラーレスカメラに切り替えた。見た感じが昔っぽいやつを選んだ。これはアナログ人間だからではない。移り変わりの早いデジタルの世界。レトロ風カメラなら、ほどなく古びてゆく感じも薄まるかな。そんなセコイことを考えたのだ。

取材で写真を撮ることが多いものの、ずっとペンの記者として働いてきたさがで、お話をうかがう時間に比重を置きたくなる。そもそも写真勝負の企画なら、本職のフォトグラファーに撮ってもらうものでもある。

いきおい、行き当たりばつたりの撮影法しか持ち合わせないものだから、入社三十年余りたつが、写真の腕はいっこうにあがらない。立ったり座ったりして、いろんな角度から、幾度もシャッターを切ること。それが「使える写真」

を撮るための、せめてもの方法だと思ひ込んでいる。

さて、このミラーレスというもの、シャッター音を消す機能がっている。シャッターを押せば響いた乾いた音が、しないようにできる。無音なら、撮られる側の表情も和らぎそうなものだ。でも、ギネンがついてくる。

「ほんとに写せているのかな」

そこで、今に至るまで何枚か写すごとにデータを確認している。普通にシャッターを押せば、写せないことなどないのだが。

昔は現在のように、その場でサムネイルをみることなどありえなかった。現場から戻り、「撮れてない」ことが判明して、支局のデスクに幾度も撮り直しを命じられた。そんなフィルムカメラ時代の情けない記憶を、この奇妙な行為の言い訳にしている。

肝心な書くことについてだって、奇妙といえは奇妙なことを繰り返している。原稿を書けば、資料とあわせ、プリントアウトをして線など引いている。そうやって確かめねば、落ち着かない。画面をスクロールして、目で追うだけでは、自分で書いたことを把握できない気がするのだ。

仕事だけに限らない。私は日々のなか、心にとまったこ

とを飛ばし飛ばしノートに書き留めている。若い頃からずっとだ。まあ読み返したことはないに等しいのだが。

などなど書き綴ったが、きりが無い。

ただ、小説『場所』のほかにも読む本はたくさんあり、紙の本が届いても開いてもいけない。名作だけに後々読みかえたいと思うが、勢い込んで買うこともなかったのだ。

原稿にしたって、プリントアウトしたところで、拙稿がたいして良くなるものではない。間違ひも自ら見つけられるものではなく、校閲セクシオンから毎度、赤字の指摘をいくつも頂いている。日記めいたノートについては、読み返すことはこれからもなからう。そもそも希な悪筆だから、文字を追っても大方、何が書いているのか分からないにちがいない。

つまり、なんの足しにもならない行為を、延々と繰り返していることになる。

暢気にボンヤリ暮らしてきた私も、すでに人生の後半戦に入ってしまった。こんな実りのない流れと分かっているも、今から絶やせそうにない。だぶん私は息絶えるまで、無駄を繰り返しながら過ごしてゆくだけの生き物なのだろう。

「学び系」の誘惑

丸 祐一

(法哲学者)

8月8日に開催された「読書室ビオトープ」は奈良敏行「三砂慶明『町の本屋という物語』が課題図書であった。

この本を読んだときにまず思い浮かんだのは、自分は「本が好き」なのだろうか、という問いである。というのも、店頭で奈良さんから、「最近、何か面白い本はありませんか」と問われて困ってしまったことがあるから。研究者なので日々、本や論文は読んでいる。研究書としてこの本は面白い、と思うことはある。でもそれが奈良さんの問われる「面白い」本なのかというところは違うよなあ、と困ったのである。奈良さんのおっしゃる「学び系」と「研究」との違いがこの困惑に関係しているのだろうか。定有堂に足を運び、並べられた本を見入っているのだから、そこに並んでいる本に関心はある。しかしそれらの本の多くは、大学院生の頃に読むことを封印した本でもあった。大学院生だから修士論文や博士論文を書かなければならない。定

有堂に並んでいるような本は、研究からの逃避先になってしまう本だったのである。だから僕はそれらの本を段階的に詰めて、実家に送りつけた。この感覚は今でも変わらない。それは「学び系」への誘惑だったから、それを避けようとしたのかもしれない。

多くの研究者が新聞等で書評を担当している。専門に近い本を選書しているとはいえ、研究・教育・学内行政をしつつ、よくそんなことができるものだ、その能力にいつも感心し嫉妬する。彼らは一流の研究者だからそんなことができるのだ、と自分を慰めるが、実際、研究に関連して読まなければならない本や論文は日々びっくりするくらい生産されている。絶版になってしまふのを恐れて、少しでも関連する本ならとにかく買っておくのだが、じゃあそれを読めるかというと、もちろん無理である。それらの本に加え、「学び系」へ誘惑する定有堂の本棚を眺めれば、あれもまだ読んでない、これもまだ読んでない、でも研究の本も読まなければ、という葛藤。それが僕にとっての定有堂だった。

奈良さんとの店頭での会話でもう一つ思い出されるのは、千葉雅也『勉強の哲学』や戸田山和久『論文の教室』などのいわゆる勉強本について、ちょっとこれは定有堂の学びとは違うというような趣旨のことをおっしゃっていたこと

である。僕は大学で卒論を書く学生に『論文の教室』は絶対読んで欲しいと思ってるし、「論文」というものを書くなら必須のことが書かれていると思ってる。しかし奈良さんは『論文の教室』をいい本だとは認めつつも、違うと。このニユアンスが僕にはよくわからなかった。それでこの度この点について奈良さんに質問した。奈良さんの回答は、「彼ら(研究者)の本はわれわれには難しい」「研究者は学んでいない」ということであつた。そして新書に対する高い評価。岩田先生からも、いわゆる博論本(博士論文が出版された本)について、東浩紀も千葉雅也も博論本以上のことは書いていない、という趣旨の発言があつた。奈良さんは論壇の衰退についても指摘された。東浩紀自身は、現在の「日本の哲学が…アカデミアのなかに閉じこもって」しまったので、1970年代の状況に戻したい、とツイート(2023.1014)していたので同様の問題関心を持っているとは思う。ちなみに、最近の博論本としては、山田祥子『グローバルな正義と民主主義』(2022、勁草書房)のスタイル(文体)が学生を指導する立場からすると素晴らしかった。こういうスタイルで論文を書けることが現在のアカデミアへの免許であり、戸田山先生の本が目指していることだろう。他方、大谷弘は『道徳的に考えるとはどういうことか』(2023、ちくま新書)で、現在のアカデミアの哲学のスタイ

ルでは表現(読解)できないことがあるという趣旨の指摘をしている。ネハマスも『ニーチェ…文学表象としての生』で、ニーチェが多様なスタイルで表現しようとしている理由を大谷の指摘するような意味に求めている。現代のアカデミアのスタイルは非常に制限的であり、定有堂のピオトール・ブーユートピアの中で共存するのは難しいのかもしれない。

スタイルの問題は別として、アカデミアの置かれた状況を自己弁護すれば、国立大学法人に関しては運営費交付金のような基盤的資金が削減される一方、科学研究費補助金といった競争的資金に応募して研究費を得なければ、本の購入も学会参加もままならなくなっている。これは、論壇的なことに力を注ぐ研究者は研究者として評価されないということにもつながっている。そういう意味で研究者は学ぶことを意図的に避けざるをえない、のかもしれない。「むだで横道にそれた知識には一種のけだるい喜びがある」(『幻獣辞典』)、というボルヘスの主張に共感できる限りでは、「本が好き」だと言ってもいいのかなと思うが、これも「学び系」とは違うように思うのである。

『町の本屋という物語』読書会(8.8)

松田 裕史

(高校教員)

『日本の七十二候を楽しむ』によると、立秋は「涼風至る」の初候から始まる。候のことばは「秋隣」。秋の気配をすぐそばに感じるといふ夏の季語だそう。次候は「寒蟬(ひぐらし)鳴く」。末候は「蒙霧升降す(のうむしゅうこうす)」。早星(ひでりぼし)や樹雨(きさめ)などのことばも紹介されており、季節をより深く味わう時間に導かれる。早星の項には宮沢賢治の詩も一部、引用されている。

『町の本屋という物語』の読書会があった八月八日は立秋に入っていたが、秋の気配は一粒も空気の中に入り混じっていないかった。一年に一回程度しか読書会に参加しない、出不精の幽霊部員のような身である。でも、『町の本屋という物語』が課題図書であれば参加人数が多くなるのは予想されるけれども行かねばならぬという、幽霊のような正体不明の使命感がむくむくと身体から沸き起ってきた。

夜七時からの開始に合わせて一五分ほど前に会場に到着したが、まだ数人しか会場にはおらず、会場セッティングもこれからというところだった。しかし、七時が近づくとつれ、そろそろと参加者が部屋に入ってきた。部屋は瞬く間に静かな熱気に包まれた。せつかつくなので席を前の方に取った。浜田さんが作成されたレポートは渾身の内容であり、本の内容を一望できる素晴らしい見取り図となっていた。自分が気になっていた箇所もほとんど網羅されていたが、見落としている部分もあり、永久保存版の報告書である。発刊時に読んで以来五カ月、本を開いていないので、復習のために付箋を貼ったページを中心に復習してから読書会に臨んだ。ノートには、少ないが次のようなメモをしていた。

変化、本と戯れる、どれでもある(何でもある、ではなく)、オリジン、アーカイック、個性は何度も変わる、オブセッション。

気になる所を全てメモしようとしたが膨大な量になるので最小限に抑えておいた。後は、読書会で浜田さんをはじめ様々な人の話を聞く中で、メモを取っていった。レヅリエンスとナラティブ思考の話が持ち上がったが、これは、三月の角田光代さんを招いた読書会でも奈良さんが触れられていたと思う。レヅリエンスは教育現場でもよく聞くよ

うになった。奈良さんが使用される意味と比較すると、教育者が使っているレジリエンスは概念として意味が浅い。

浜田さんのレポートのはじめに四つの個性が整理されている。それを読んでいて、奈良さんの両義性に気づいた（我田引水かもしれないが…）。いや、本を読んでいる最中にも何となく気づいていたのかもしれないが、今となっては分からない。ともかく、一人で読んでいては意識の前景に出てこなかった点だ。両義性については、「『それから』の定有堂」その五」でも言及されている。その中でミハイル・バフチンのポリフォニーとカーニバルのことを奈良さんは引き合いに出されている。バフチンは言語教育を考える上でも極めて重要な思想家だと思っているが、そんなことを考えている教員は周りにほとんどいない（唯一、初任者研修の時の講師の先生が資料としてバフチンを引用された時は衝撃を受けた。その先生とは後に勤務校が同じになり、大きな影響を受けることになる。）もう一度、アーカイブクなバフチンを読み直してみたい。

さて、読書会の途中、前方に座っていたため他の参加者が発言される時には振り向いて聞いていた。前から四列目あたりに座っていらっしやる男性のメモの取り方が気になった。他の人がどんな筆記具でどんなノートを使っているのかが気になる性質である。最近はいPadやノートパソコン

コンにメモをする人も増えてきたが、僕は相変わらずアナログ派である。その男性はやや太めの万年筆で厚めのノートにさらさらとメモを取られていた。僕にはとても真似できない所作であり、その風情には秋隣を思わせる涼やかな感じがあった。定有堂閉店のことに話が及んだ時、奈良さんがその男性に水を向けられた。

その男性は詩人の白井明大さんだった。

定有堂閉店の際、何冊かの本を購入した。でも、すぐに読む気になれず一年以上、紙袋の中に入ったままだった。それが、読書会の後、次々と取り出しては読めるようになった。

この文を書いている今日は九月一七日。『日本の七十二候を楽しむ』には白露の末候、「玄鳥（つばめ）去る」と書かれている。日中はまだ猛暑が堂々と居座っているが、蜩の鳴き声が朝夕、耳を撫でるように響くようになった。僕が年間で辞書以外に最も手に触れる本は『日本の七十二候を楽しむ』である。

その著者は、白井明大さんである。

川辺へ、そして川辺から

白井 明大

(詩人)

鳥取に移り住んで四年目になるけれど、ほとんど毎日家にこもって書き物をする単調な生活を送っていて、息抜きといったら仕事が一区切りつく夕方に新袋川の河川敷や土手を川上へ、国府のほうまでゆっくりと自転車漕ぎながら、まわりの景色、とくに野鳥の姿を眺めることだったから、川辺の情景がしぜんと身にも心にも染みこんで、折り重なって、ぼくの中に少しすこし蓄積されているんじゃないかと思う。

川原でひなたぼっこをして、人がそばを通っても逃げようともしない雉を見かけた驚き。真冬の雪降る黄昏どきに水辺の枯れ草の先から素早く川に飛び込み、獲物をとらえるカワセミに初めて出会えた喜び。春に本州の中部以北へと渡る通りがかりに立ち寄っていくノビタキ。季節の声を告げてくれるホオジロ、セキレイ、ヒバリ、オオヨシキリ……。鳥を眺めることは、なくてはならない生活の一部

になっている。

サイクリングの途中で大伴家持の歌碑があると道案内が出ているのを目にしたときは、吸い込まれるように土手から曲がる道に入ってしまった。万葉集を編纂した人。石に彫られていたのは立春に詠んだ歌だった。山あいから平らな土地へと川が流れ、田畑が広がり、ぽつりぽつりと近くに小山が、遠まきにより高い山なみが平地を囲むようになり、歌碑から川のほうをふり返ると、小山のひとつつたつが視界に入って、ああ、あんな山を見ながら、日々感じながら、ちょうど立春と元日が重なった珍しい日に降る雪にふれて歌を詠みたくなったんだろうかと、千二百年余り前もいまでもどこか重なる光景はきつと残っていて、この地を訪ね、暮らすことは、そうした万葉の風景と、意識するともしないともなく居合わせることもあるのかなと思えて、そう思えると静かなうれしみが心に満ちてくるようで、いいものを見たな、また来よう、と自転車で乗って川辺へと戻っていった。

そのとき視界に入った小山のひとつが、どうやら安土桃山時代にくさの勝敗を分けたらしき山だったと、これは今年になって山のふもとの説明文に遅まきながら気づいて、飯山(こしきやま)という名前とともに知り、サイクリングのときには、この辺りまで来るとそろそろ帰ろうかとUター

ンする場所でもあったから印象に残っていた。こんもりとしたその小山が、知ってみると、そうか、古戦場だったのかと、おのずと見る目が変わるような気持ちにもなって、でも眺めていれば山は山で、歴史の背景を知っても山の佇まいに変わるところはなく、大きなおにぎりがどっしりと腰を下ろしたような山容を視界に入れながら、ふもとの土手道を自転車走っている。

そのときそのときにこの辺りに人がいて、そのつどそのつど何かがあって、生の営みの痕跡を残しながらも、山や地形のおもかげは、おそらくそう変わらずに続いてきたのかな、と感じられるところがあるのが国府のこの辺りでもあって、ではそればかりが印象の多くを占めるのかといえ、それとはまたべつの、今日このときに心にきざすものがあることに、ほっとすればほっとして、はっとさせられることもあって、夕暮れの西の空へ目を向ければ田畑の向こう、遠い山々に日がかかり、空を赤らめ、そんなふううに山に囲まれた土地に、その風景になじみのなかったぼくとしては、自分がここに住んでいるというよりは、旅しているような、宿からちよつと出て近くを散歩しては景色を楽しむつもりが胸の奥をわしづかみにされたまま日暮れの光景を前に、自転車を降りてじっと佇むことがある。

それは神話と結びつけてこの地のことを考えてしまうと

ころからも来ていて、因幡、出雲といった山陰の、古い歴史の向こうへと思いを馳せたくなるような、人はどこから来たのだろう、何を感じ、思い、この地に立ったのだろう、など取りとめのない問いを巡らせ、万葉や戦国とはまた異なる、はるかな古代に心が行つてしまいたくなるような、時の流れにも地層はあるのだろうか、目に見える形ではないとしても、時間の堆積は、想像やイメージとなって心に訪れることもあるかもしれない……と空想にうずもれる気持ちをとときおり覚える。

足繁く通うといつたつもりでもなく、ただ一日のひととき、外の空気を吸いたくて自転車で走るということをくり返しているうちに、新袋川から袋川にかけての情景が、いつかは書きたいと願つてきたファンタジーの世界へと分け入っていく通路になつてくれたのかもしれない。舞台がそこはかたなく見えてきて、流れをたどるように書きはじめたとき、内なるイメージの川として、小コブ川という架空の川の名前が思い浮かんだ。『ヘリヤ記』という物語の端緒にふれた瞬間だった。

人間がかく日記

鳥居 貴彦

(開風社 待賢ブックセンター)

跡と鼻を刺すケモノの匂いが残されるようになった。たまに庭の向こうの暗がりからじつとこちらをみている小さな影。彼らにとつてここはいい遊び場なのかもしれない。ここは誰の庭だとか、汚すなというのは人間が勝手に決めただけのことだ。それはわかる。わかるのだが、ここに住む人間は困っている。たのむからやめてくれ。

昼間、本屋に誰もいないのでゴロゴロしていると裏の庭の方からガサガサと足音がする。わりと大きな音だ。人間？でも誰が？ そつと覗くとイタチが二匹、樫の根元でじやれていて。何か悪きをしているわけではなさそうだ。ガラツと窓を開けると二匹ともあつという間に走り去つていった。ケモノの匂いが鼻を刺す。翌日、夜になってまた音がする。外に出しているゴミ箱の上で暴れているいきものがある。暗くてよく見えないがあのイタチだろう。ゴミを荒らされるのは困る。わざと大きな音をたてて窓を開けると静かになった。が、何かがこちらをみている気配がある。「やめてくれ」と言ってみる。カサカサと小さな足音が遠ざかつていく。ケモノの匂いが鼻を刺す。その後も朝起きると庭に置いてあるメダカの水槽の水がこぼれてびちゃびちゃになっていたり、縁側が泥だらけになっていたり、困った痕

またテレビのカメラがやってきた。貧乏な本屋を写すのが流行っているのだろうか。京都の経済がどうかという番組だという。ほとんど経済的な活動をしていない本屋にやってきて経済がどうかと聞かれても困る。どういふつもりなのだろう。うちで大丈夫ですか、と何度か聞いたのだが大丈夫だという。結局、「最近の書店の減少についてどう思われますか」などと聞かれて、さあ…とかが言っている。放送の日、どんな映像になるのかと思ってみていたら、京都の出版社がいくつか紹介されたあとに「書店側の新しい取り組み」と紹介されていた。自分は「書店側」だったのかと少し驚く。どちらかの側に立っているとは思わなかった。出版社と本屋は別の「側」なのだろうか。

わりと珍しく真面目に話したつもりだった「本屋と出版社と問屋の仕組みのあいだに人間がない」という話は見事に全部カットされていた。伝わるように話すのはむづか

しい。

小さな本屋を応援したり、本を仕入れるようにする仕組みができることはいいことだ。みんなもつと本屋をやればいい。だけど仕組みだけで本屋はできない。いまぼくがこの小さな本屋で新刊の本や雑誌を仕入れることができているのは、電卓の計算や会社のルールを超えたところでたくさんの人が動いてくれたからだ。仕組みを考える人はえらい。ありがとう。でも仕組みだけつくれば本屋は成り立つのだろうか。もし成り立つたとして、その本屋は誰を相手にしているのだろうか。仕組みは本を買ってはくれない。仕組みの隙間でうろろろしている人がもつと必要なのだと思う。本屋は人間がやっている。客も、店主も、店員も、ぜんぶ人間がやっている。

この夏、パリでやっているオリンピックに妙にはまってしまった。夜になるとパソコンを立ち上げて画面を眺めている。みるのはセーリング。ほとんどの時間、風を待っている。延々と南フランスの海岸の景色が映っているだけだ。いつレースが始まるのか、誰にもわからない。風が吹いてきたらきつとコースがひかれ、スタートの合図がでる。レースは十分ほどで終わる。見れたらラッキー。大体眠気が勝って次の日に録画を見ることになる。一昔前のヨットレー

スは見ていてもなにが起きているのかさっぱりわからなかったが、今回は違った。GPSを使った位置情報やスターラインが映像に加えられていて情報が多い。ただ、わかりやすいとごちゃごちゃしてるのは紙一重だ。一緒に見ている六歳の息子も「黄色チームが早いな」「ゴールしたな」とわからないなりに画面を覗き込んでいいる。説明しようにもどこから説明したらいいのかよくわからないし、「風ってどうやってつくられるん」とかいったものすごく根本的な質問が飛んできたりするので油断できない。細かいルールはいろいろとあるのだけれど、ごちゃごちゃといろんな船がいて、選手たちが一生懸命ヨットを操って、最後に誰かが勝つたらしい、くらいの理解でとどめてもらうことにする。ルールをわかるためにみているのではない。それでは免許更新のビデオと同じだ。ルールの中で人間があれこれしているからおもしろい。ただどれだけ眺めていても画面から風は吹いてこない。今度一緒に乗りに行こうなど約束してパソコンを閉じる。で、風ってどうやってつくられるんやっけ。

「開風社 待賢ブックセンター」

京都市上京区大宮通榎木町上る菱屋町8-18

「リーチ先生」を読む

山下 篤美

(魔女修行中)

そば猪口でワインを飲むという使い方も、大学を出たばかりのひよつこの私には衝撃で、まるっとその器に心惹かれたのでした。

前号の「音信不通」で、既にバレバレでしょう。私の民藝好き。長く鳥取を離れていても、心の一部がここに留まっていた理由に、鳥取の民藝、殊に器にそれがありました。

ちょうどその頃、その器を作られた浦富焼の故山下碩夫（みつお）先生が、ギャラリー「集」で陶芸教室を開いていることを知りました。好奇心の塊でしかなかった私は、その心の赴くまま教室に申し込み、直ぐに週一回、教室に通うようになりました。しかしながら、いかんせん根っから不器用を絵にかいたような私。気持ちはあつても腕は全く上がらず、ろくろを回せば「どうしたら、そんなところに土が飛ぶんだろう」と先生に苦笑いされる始末。自分でも嫌になるほどのダメダメぶりでした。

民藝を意識するようになったのは、一つの「そば猪口」との出会いでした。地元新聞社の先輩であり、この「音信不通」の書き手でもある萩原俊郎さんのお宅に、当時の先輩や同僚とわいわい、がやがや遠慮なんでものが全くない面々で、お邪魔した時のこと。ワインを飲むのに手渡されたのが、浦富焼のそば猪口だったのです。すつと手に馴染む大ききや形に加え、白地に呉須の青で描かれた浦富の風景。その染付の絵が、何だかとても懐かしく、それでいてひどく新しいようなそんな印象を持ちました。そもそも、

それでも先生ご夫妻は、私のことを面白がって見守ってくださり、陶芸仲間と一緒に登り窯の窯焼きを間近で見させていたたく、そんな非常に貴重な経験を得ました。あの夏の、文字通り顔を焼くような火の熱さ。眠い目をこすりながら、窯の蓋のその先にある暗闇に映し出される炎の煌めき。火の神様に対する畏敬の念でぎわついていた思いは、一生忘れることのできない景色となって焼き付きました。

先生が、弟の清志さん（現在は延興寺窯の窯元）と共に復興した浦富焼。実はその復興の陰には、前号でちらりと触れた鳥取で新民藝運動を展開した吉田璋也の存在がありました。その吉田が憧れたのが、民藝と言う名前をこの世に生み出した柳宗悦。吉田が柳に出会った記念に買ったのが、当時柳らと共にあり、この本のタイトル「リーチ先生」にもなっている、イギリス人のバーナード・リーチが描いた絵でした。

この小説は、原田マハ著。リーチの側で彼を支え、陶芸に出会い、やがてはその元を離れて名もなき花として、陶芸の道を極めようとした沖亀乃助。そして、時を経て出会うその子、高市の目を通して、穏やかで温かい眼差しと高い美意識を持って、東洋と西洋を繋ごうとしたリーチ先生が描かれています。小説は前述の柳、またリーチと共にイギリスに渡った濱田庄司、白樺派の著名な作家など。実在の人物が数多く出てくるので、史実に基づいたノンフィクションなのかと思いきや、なんと沖父子の存在だけは、作家が作り上げた人物のよう。作家って実に恐ろしい想像力の持ち主なんですね。あっぱれ！リーチは鳥取にも来ていて、吉田が建てた湖山池を臨む「阿弥陀堂」を訪れており、写真も残されているんですが、残念ながら小説に吉田は描

かれてはいません。吉田ファンとしては、そこはちらっといいから、出てきてほしかったんですが。

いずれにしても、どの時代、どの世界においても、若者が情熱を傾け、まだ見ぬ未来の世界を切り開いていく姿には、グツときます。久々に本を読んで、じわつと涙が…。「情熱万歳！」一言でいうと、そんな気持ちになる本でした。

因みに、来年は民藝という言葉が生まれて100年目。私自身の関心事として、しばらくこのネタ続きます。お付き合いいただければ幸いです。

「定有堂教室」サイト

こちらのQRコードから←

お気軽にお問い合わせください



Tutti Frutti

高木 善祥

(SHEEPSHEEP BOOKS)

九月二十一日と二十二日の週末二日間、青谷音楽祭に出店してきた。ロング・トール・サリーというバンドで活動しつつ古着屋を営んでいる梶田さんの、「地元である青谷を盛り上げたい!」という熱い思いで立ち上がった企画。出演するアーティストも錚々たるメンツが集まった。

梶田さんがチラシの設置依頼に来られた際にこちらから声を掛け、出店させてもらうことになった。

気持ちとしてはお店の宣伝・売上への期待…いち音楽好きとして、の割合は五:三:二だ。

テント・イス・テーブルに本と什器を車に載せ、七時前に出発。着いたら車の誘導係が知り合いで「やあどうもどうも、お久しぶりです」から始まるフェスの地元感よ。

「出店場所の近くに車を停めて、荷物をいくつか下したところで、別の知り合いとしばし立ち話。のほほんと準備を

していたら、突風にあおられた向かい側のテントが飛んできて、まさかの顔面直撃。眼鏡の鼻あて部分がペチャンコに…

たんこぶと花が赤くなった程度で流血騒ぎにならなかつたのが、せめてもの救い(数日痛かったけど)。運転用程度の入ったサングラスでひとまずしのぐ。

持参したおもりだけでは足りず、ペグを借りてしっかりとテントを固定し、什器を設置し本を並べて準備完了。

少し離れた本部テントで開催のアナウンスがあり、DJが曲を掛けてゆるやかにスタートする。

出店場所がメインステージの近くだったので、心地よい音楽を全身で受け止めながらお客さんと会話し、本を売る。

ステージの近くに占いのブースがあつて、初日のトリ前、ブルーハープがガンガンに客を煽っている最中に占つてもらっている人がいた。ステージからの大音量に負けない声で相談し、占い師も負けじと大声で占いの結果を伝えてくれる。わざわざフェスに来てて、日本を代表するヒップホップグループが演つてるのにな? 今?? と、奇妙で興味深い光景だった。「人によって優先順位は違う、人生色々」であることを学ぶ。

二日目は雨と風が強く、午前中は開店休業状態。演奏を

聴いたり、出店している知り合いのところをウロウロしたりと、人生初のフェスを楽しむ。

午後から雨も徐々におさまり、トリの民謡クルセイダースで晴れ間も見え始めた。会場もグツと熱を帯び、自分も店を放り出して聴き入った。

来店した方の割合が、知り合い or お店に来たことがある方、名前は知っていたという方、初見の方でそれぞれ三分の一ずつ。二日目に出演したバンドメンバーの方が、コミック文庫のセットを買ってくれたし、SNSのフォロワーも増えたし、お店の宣伝が主な目的だったので良しとしよう。

音楽フェスにからめて、古書と新刊どちらも音楽関連のものを選んだけれど、それ以外の本も結構売れていく。軽めのエッセイ、セクシュアリティやフェミニズムに関するもの、地元作家の作品など。財布のヒモもゆるいのは、と期待を込めて高めの古書も持って行ったが、こちらは売れず。二日目に商品の入れ替えをしなかったのも、今回の反省点。

購入していただいた方には、韓国インディーズの布教活動の一環として、自作のフリーペーパーをおまけでつけた。ちなみにこのフリーペについては、あえてSNSには上げず、

店頭で音楽好きな方に手渡ししている。

一人でやっているもので、外に出ると店は閉めざるを得ないけれど、宣伝とマーケティングリサーチ、そしていろんな方とのつながりを得るため、もうしばらくは出店活動も積極的に行おうと思う。

【参考文献】

『DEBALCE PATH 特集：ハードコアパンクの読書』別冊2 Gray Window Press
二日間で一番売れたZINE。

『サンバの国に演歌は流れる』細川周平 中公新書
民クルのように、伝統音楽をアップデートする動きは世界各地で盛んになっている。名著。

『音楽』岡野大嗣 ナナロク社
このフェスで売れたかっただけ売れなかった本。

定有堂ビル2階 古書・新刊の本屋

SHEEPSHEEP BOOKS 店主 高木善祥

本を作る側から (19)

本を作る側、売る側、届ける側のお話。

村瀬 謙介

(小取舎)

かつて、私は書店で働いていたこともあった。売れた本のスリップを計上し、再入荷する本を選んでいった。私が書店員を大阪でしていたのはもう二十年以上も前のこと。レジは手打ちで、本の間にはページを跨ぎ挟んである紙「スリップ」を抜いて保管していた。スリップを半分にちぎって半分は売上カード、半分は注文カードなので注文カードの方に店のハンコを押して本部に送る。独立系書店では直接取次に送るのだろう。

小取舎が書店に置いてもらっている本は、委託の場合、書店側から見たら出版社(もしくは取次)から借りている本である。なので売れずに返品となった時にスリップがないといけない。というのが昔の話。今はスリップを捨てていきますという書店も少なくなない。パソコンで全て管理して

いるからだ。今から思えばスリップを処理していると在庫や売れている本を感覚で体感できていた。パソコン上の数字じゃなくてスリップ(売上カード)の処理の量で「ああ結構この本売れたな」とタイトルを記憶される訳である。売れている感覚。なぜこの本がこの店で売れるのかという分析のきっかけにもなる。

九月九日に、五月にできたMEGAドン・キホーテ米子店へ行ってきた。この建物の三階に今井書店MEGAドン・キホーテ米子店が入っているのでどんな感じなのか気になっていた。行くまで「なぜ本を読みそうもないターゲットを狙った場所に開店するのか不思議」だったが、行って納得した。店舗面積の六〇七割はコミックコーナーだった。残り三割程度に文芸コーナーもあり、話題の小説やエッセイなどが平置き面出しされていた。グループで今井出版を持つている今井書店さんなので、この店舗にも地方出版の棚がある。小取舎の最新刊『宇沢弘文「社会を治す」社会的共通資本の再解釈』も棚差しで置いていただいていた(ちなみに近くの錦町店では平置きしてあった。ありがたや)。なるほど。客層に合わせたどのジャンル、どの本を展開するかを近隣の店舗毎に替えているのだな。店舗面積は変わらないのでレイアウトも大変そう。ブックセンターコスモ

さんは私がまだ少年だった頃、CD売り場面積も広がった。歴代スタツフが時代に合わせてレイアウトを替えてきた。

時代に合わせてといえは最近目につくのが絵本コーナー。昔ながらのほのぼのとした内容に、マツトな手触りの良い絵本は相変わらず人気ではあるが、『しましまぐるぐる』シリーズのような仕掛け絵本は眩しいくらいキラキラピカピカしていたり、指人形ができるものもあれば、もう絵本というかオモチャなのだと思わせる絵本もたくさん出版されている。一体一冊作るのにいくらかかっているんだ……。

*

MEGAドン・キホーテ米子店と今井書店錦町店との間に鳥取県教科図書販売株式会社があったので寄ってみた。アポイントをとっていたわけではなかったので小取舎の担当のT氏はお休みで、現担当のK氏は外出中であった。教科図書販売さんには小取舎の設立当初から今井書店他への配本をしていただき、大変お世話になっている。しかし、これまで電話やメールでのやりとりで本を送るのも運送会社を使っていたので一度もお会いできていなかった。この度米子に行かなければと思ったのも新店舗だけの理由では

なく教販に寄ることも私は考えていたはずだが、今思うとなぜアポイントを取らなかったのか。いや、それよりもなぜもっと早く会っていなかったのか。T氏とはちよつとしたことがあり昨年春から担当を上司であるK氏に替えてもらっていた。だがいつかお会いしてお話したいと思っていた。その一週間後にお悔やみ欄でお名前を見ることになるとは思っていなかった。歳も殆ど変わらないことも初めて知った。

小取舎の本を読者に届けてくれてありがとうございます。とても、とっても感謝しています。

小取舎の最新刊

『宇沢弘文「社会を治す」
社会的共通資本の再解釈』

岩田直樹 著

二〇二四年七月二九日発売



汽水のほとりから (43)

小原 修治

(県立高校教諭)

湯梨浜町松崎在住)

坂口恭平の『生きのびるための事務』（マカジンハウス）が売れているそうである。9月末現在、紙と電子あわせて発行部数7万部を突破するベストセラーになっているという。坂口にとつては、約十年前に6万部のベストセラーを記録した『独立国家のつくりかた』（講談社現代新書）以来の、いや、それ以上の大ヒットということになる。但し、今回の本は漫画であり、坂口は原作者の立場だから、著者は漫画家の道草晴子ということになるかもしれない。が、その読後感は、やはり坂口の本以外の何ものでもない。坂口は熊本の人。高校卒業後、早大工学部建築学科学科で石山修武に師事した。『生きのびるための事務』という書名は、石山の『生きのびるための建築』（NTT出版）へのオマージュだろう。彼は有名私大に行きたかったわけではなく、石山に教わりたかったから早稲田を選んだとど

こかで書いていた。先日鳥取市でお会いした東京の Fan Saw Press のシンケさんによれば、在学中から坂口は石山の秘蔵つ子として有名だったそうだ。シンケさんは、石山のゼミの数年後輩で、先輩に負けず劣らずのユニークな生き方を実践されているが、DIY好きな石山の弟子たちは、もはや建築だけでなく、あらゆるものをDIYしようとしており、坂口はその代表格なのだろう。前掲の出世作『独立国家のつくりかた』は、いわば国家政府をもDIYしてみるといふ発想によつて書かれ、多くの読者を得た。

坂口は多彩な人だ。文章を書いて稼ぐ文筆業以外にも、絵を描いて売る画家であり、作詞作曲した歌を自ら唄ってCDを出す音楽家でもある。彼はこうした活動をしながら生活していくにはどうすればよいかを大学在学中に考え、売れる売れないは度外視して、とにかく将来思い描く生活を先ず実践してみることが大切だと思つたという。そこで必要だったのが「事務」といふ発想であり、それは具体的に毎日二十四時間をどう使うのかということだった。将来何者になりたいかよりも、将来何をしたいかに重点を置くことで、具体的な行動を自分自身に課したのである。何者かになることはすぐ実現できないが、何かをすることは今すぐ実現し得る問題だ。生きのびなければならぬのは将来ではなく、今現在であり、それは日々の繰り返しに

他ならない。「事務」とは、その繰り返しの作業なのだ。

ところで、『生きのびるための事務』には「ジムくん」というキャラクターが登場する。ジムくんは何故か坂口の部屋に住みついていて、色々とアドバイスをしてくれる。自分で決めたこととはいえ、自分で自分に日々「事務」を課すことは、自分で自分を律することでもある。だから、怠けないでやり通せるかどうか、自分を見守るもう一人の自分が必要になる。その「もう一人の自分」が「ジムくん」だろう。すると、これはフロイトの心理学という「超自我」のことではないか。フロイトによれば、人間の心は「エス（イド）」「自我」「超自我」の三つの領域に構造的に分けられる。「エス（イド）」は無意識のことであり、「自我」は意識のことだが、この両者とは別に「超自我」というものがあり、両者の見守り役をしているとされる。「くしてはいけない」とか「くすべきである」とかいった道徳的発想は「超自我」によるものだが、絶体絶命の自分をユーモアで救ってくれるのもまた「超自我」なのである（「ユーモア」『フロイト著作集3』所収）。ジムくんが窮地の坂口を救うのは、それが「超自我」だからだろう。

思うに、坂口恭平は「超自我」が特別に大きな人なのだ。その証拠は他にも見つけられそうだ。「超自我」の形成には、道徳的に厳しい大人の存在が不可欠とされるが、小学校の

入学式で新任の佐藤先生に教わった「いのちのおかわりはありません」という言葉に感動したことを理由に、坂口は十年以上前から自身の携帯電話番号を公開し、死にたい人なら誰でもかけてよい「いのちの電話」というサービスを続けている。無論、自殺者を無くすためだ。ちなみに、今回道草晴子とタッグを組んだきっかけは、今から六年前に彼女が「いのちの電話」を利用したことだったという。

レヴィーストロースの『悲しき熱帯』を読んで、坂口は自身が首長的な生き方をしてきたことが分かったとして、こう書いている。「共同体がまずあつて、そこから首長が誕生するわけじゃない。首長になるかもしれない人間から、多次的に漏れていく時間空間によって、そこで暮らすことになる集団が形成されていく。（中略）僕は自分のことを一人の人間だと思っていない。僕だけじゃなくて、その周りの人間、さらに人間だけじゃなくて、石や地面も風も植物もつまり、その周囲の空間、建築すべてが、自分だ。しかもそれは自分ですらないと思つてた。つまり、それは共同体そのものなんじゃないか」（『まとまらない人』リトルモア）。彼は「自我」もまた特別に大きな人なのだ。

私「鳥取市美術館」の味方です

萩原 俊郎

(倉吉市在住者)

先日、鳥取市の芸術団体や市民らが「鳥取市美術館の実現へ動き出した」という新聞記事が載っていた。

さもありません、と思った。日ごろ「ハコ物行政」には批判的な私がおかしいではないか、と言われるかもしれないが、それほど鳥取市および県東部の住民は、県都でありながら芸術を鑑賞する環境が貧困なのである。だから最大限、この運動にはエールを送りたい。

◇ ◇ ◇
平成二十五年の秋、私は県立博物館の館長室にいた。

Y館長は元工業高校の校長で理科の教師、気さくで率直な方だった。「もうパンク寸前なんですわ」。美術だけでなく自然・人文（歴史）の3分野の展示・収蔵を担わされた県博の収蔵庫は、開館当初の約十二倍に膨れ上がった資料・展示物で溢れていた。

館長の悲痛な訴えを聞いて十一月三日の文化の日、「それでも美術館の夢」という社説を書いた。県立美術館構想はいったん鳥取市の桂見に建設が決まりながら、1999年、ひつ迫する県財政を理由に片山善博知事が「凍結」を宣言、事業はストップしたままだった。

私の居住地は倉吉だが、社説ではこう書いた。

「今年8月、米子市美術館がリニューアルされた。県西部は山陰道を通って鳥根県立美術館や足立美術館にも近い」「県中部は倉吉博物館が洋画、日本画、彫刻の『トリエンナーレ美術賞』を四半世紀前から全国公募するなど、芸術家の育成にも熱心だ」「一方、県庁所在地の鳥取市・県東部は……と言えば『お寒い限り』なのが実情」

社説直後の県議会で県教育長は「凍結を解いて検討委員会を設ける」と答弁。その翌日には、当時の竹内市長が湖山池畔で閉幕したばかりの全国都市緑化フェアの跡地を「提供する用意がある」と申し出た。県立美術館構想は14年ぶりに再び動き出した。

◇ ◇ ◇
ところが、始まったのは美術館のテーマや展覧方針の議論でなく、またぞろ建設地の綱引きだった。

「県庁所在地の立場で、またもオカミ頼みで東部に引く張るのか」「西部の人間には遠すぎる。せめて中部だ」

確かに、サッカー専用のバードスタジアムなど「なぜ東部に？」と首をひねる施設もないではないが(笑)、東部がみんな「オカミ頼み」だったわけではない。

それどころか、同年「自分たちで今できることから」と書家の柴山抱海氏、写真家の池本喜巳氏らが市内の芸術・文化団体に呼びかけ、マンネリ化した市展を大胆に改革、なんと入場者を倍増させていた。

ところが市展は、県立博物館の企画・巡回展のすき間を縫っての「間借り開催」で、今年は夏、来年は秋と会期の確保もままならず、市独自の展示施設を持たない悲哀をさんざん味わったはずだ。

そして当時の鳥取市は、先に建てたやまびこ館(歴史博物館)の維持や負担、大もめにもめた市庁舎移転問題があり、市の美術館どころではなかった。

今回、その柴山抱海氏や池本喜巳氏らが市美術館運動の発起人という。一本、スジが通っている。やはり鳥取市や県東部にはきちんとした美術展示と収蔵の施設がある。建設費や立地など大変だが、ぜひ開館の日を待ちたい。



倉吉市では、楨文彦氏(故人)の事務所が「意匠設計」した県立美術館が、来年春の開館を待っている。建設地の選定をめぐって、県内の芸術・文化団体の間には少なから

ず反目やしこりが残った。

振り返れば、石田前市長が「ぜひ倉吉へ」と誘致に働いたような記憶がない。中部の首長らの頭には、東部との誘致合戦に前回敗れたが、前田寛治の故郷で山陰道やJR山陰線にも近い北栄町があった。なのに、内陸部で山陰道や倉吉駅からも遠く、寺院遺跡に接しているため道路ぎりぎりに建てざるを得なかった現在地がなぜ選ばれたのか。

これだけでも集客はかなり不利で、「あとは人気建築家の隈研吾氏頼み」と「人寄せパンダ」のようなことも願ったが、現役バリバリの世界的建築家は、今年6月に老衰で95歳で亡くなった楨文彦氏にコンペであっさり敗れた。

さて、もうお分かりかも知れないが、私は県立美術館の行く末にかなり不安を抱いている。ただ、ゼロから美術館を建てようとする東部の方々の努力や熱量を考えると、勞せずして美術館を得た中部の人間は、せめて閉古鳥が鳴かない施設になるよう努めるしかない、と思うのである。

ゲンジものがたり

或いは、トレーディングカードのこと

ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

思い出すのは、仮面ライダーカードである。

一九七一年四月に放送が始まった同番組に合わせて、カールビーが発売した袋菓子のおまけに封入された。

カードだけを抜いたら、菓子は食べずに捨ててしまう事例が多発し、社会問題にもなった。空き地に袋ごと散乱しているのをよく見かけたものだ。

同社のかっぱえびせんに似た生地をベースに(もちろん海老は入っていない)ぬるい甘味があつて、梅の花のような形をしていた。塩味のえびせんと違って、そう沢山食べられるものではなかった。

怪人百科なんて出ていない時代だから、みんなが争って買い、交換に精を出していた。

その四、五年前くらいに、森永が、「トコちゃんキャラ

メル」という、ヤダモンとブースカを足したような、妙な怪獣キャラクターの箱絵の商品を出したことがあった。中に、怪獣カードが入っていた。正式には、何と言ったか、「ステレオスコープ」だったかな、プラスチックを張り付けた厚いもので、向きを変えると絵柄が動くのであった。

怪獣はガメラなど大映系のもので、恐竜、それからオリジナルで、「電送怪獣エレキドン」とか「隕石怪獣ラジゴン」とか、パチモン臭いデザインのものがあった。ガメラやバルゴンが欲しいのに、エレキドンばかりが出てくるので(出てくるのだ、これが矢鱈と)クサったものだった。裏に、諸元表と、別に5桁の数字やじゃんけんマークが付いていたので、ゲームなどの使い道があったのかもしれない。

紙メンコというのは、ボール紙発明以降だから、明治時代に遡る。取ったり、取られたり、常に所有者が変わるので、ある意味、トレードと言えなくもない。

メンコというのは、関東風の呼び方であつて、当地では「ゲンジ」と呼んでいた。より現地音に近い表記をすれば「ゲンジイ」となる。

メンコの呼称については、鷹家春文の研究が詳しいが、

大掴みに、関東が「メンコ」圏、関西が「パッチン」圏である。より細かく区分するならば、京都・滋賀・三重のライン以东がメンコということになる。もちろん、地域によって入れ込みはある。(珍しい呼称としては、三重・和歌山のケン、岐阜のシュッポン、長崎のウチオコシ、鹿児島のカッタなど)

しかし「ゲンジ」というのはかなり特異で、鳥取県の、それも東部地域に限定される。同じ県内でも、中部は「パッチン」なのである。(旧泊村と東郷町の境が分水嶺)ちなみに西部は「ペッター」が軟化した「ペッター」である。(鳥取県民俗資料館等連絡協議会事務局「「めんこ」の呼び方について」)

このメンコなるもの、遊んだことがある人(概ね六十代以上の男性になると思うが)はご存じだろうが、実にパチモンの宝庫であって、というよりもパチモンしかないのではないか、というくらいいい加減な絵柄が多かった。伝統的な絵柄としては、武者絵があり、「ゲンジ」という名称は、この辺りに由来しているらしい。

我々の頃は、アニメやドラマなどの絵柄が主流で、何と

なくアトムかなあとか、忍者部隊っぽいなあとか、思わせる絵なのだが、どこか変、そうだったものだった。形は基本、円であって、大きさはEPPレコードくらいのものから、牛乳瓶の蓋くらいのもので、何種類もあったが、扱いやすいのは掌サイズのものだった。大きいのは、風圧が凄く、一度に何枚もひっくり返せる理屈だが、張る時の空気抵抗が半端でなく、狙ったほどの効果が出るものではなかった。名刺を小振りにしたくらい角メンコもあるにはあったが、当地で使用する子供はいなかった。

蛇足ながら、「源平碁」という遊びがあり、表と裏を赤と白に塗り分けた碁石様の円盤を使って、碁盤状の盤の上で陣取りを行うもので、自軍の石で相手の石を挟むと、間の石が全部裏返って自軍のものになる、というゲームである。源氏の白旗、平氏の赤旗に見立て、源平合戦になぞらえたものらしい。

メンコも、相手を裏返したら自分のものになるので、この辺りの相似も「ゲンジ」由来のひとつではないかと考えてみたものの、如何せん、源平碁は戦後に普及した遊びの上、そもそも外国由来の遊戯なのであった。

鳥取あれこれ その九十八

内田克彦（地域研究家）

鳥取県が一九六八年に発行した『百年の年輪』には、キリスト教の布教について次の記述がある。

組合教会が、神戸・岡山から鳥取・倉吉へと入ったのに対し、西部ではバクストンの影響で聖公会の影響が強かった。これには布教上の協定があったともいわれる。

『鳥取教会百年史Ⅱ』の「年表」によると、一八七九（明治一二）年に、同志社第一回卒業生の加藤勇次郎が「鳥取にて伝道、新教伝来の濫觴となる」とある。

翌年には、J・K・デフォレスト宣教師、上代（「かじろ」知新「ともよし」）牧師が来鳥し演説会を開く。次女のC・B・デフォレスト（のちに神戸女学院校長）が書いた一九一四年出版の父の伝記を、鳥取大学地域学部二〇一七年度地域調査実習の一環で翻訳したもので引用する。三夜連続の説教の後、翌日には帰る予定だったが、もう一泊し九名の男性たちと会っている。

上代のニューヨークでの旧友が、師範学校校長に就任しており、その妻と積極的に声掛けしてくれた。

〔初日〕この劇場の通常の収容人数は600人であったが、押し合いへし合いしながら、その数は100か200以上多くまで膨らんでいた。〔二日目〕ぎつしり詰めれば1200人収容可能な、この地域で最も大きな劇場を借りることにした。〔三日目・雪〕町全体が扇動されており、劇場はすぐに満員になった。

その後、八五年上代がアメリカン・ボードより専任伝道者として派遣され、八七年には鳥取英和女学校が設立されて、協会独立の原動力となっている。鳥取教会の創立は九〇年二月二三日で、所在地は『Ⅱ』（三九一頁）によると、「元魚町一丁目石井邸の説教所」とあり、「その後、西町二一五番屋敷の建物（智頭街道筋森写真館隣り）を借り受け、鳥取基督教会所として一九一五年（大正四）新会堂が現在地に献堂される創立二五周年まで借家の教会として使用」とある。

創立以前の拠点は、『Ⅱ』の二六六頁では「信徒有志四、五人で市内若桜町に家を借りて開講した説教所

は、その後、鹿野街道糺屋又兵衛方へ引越し、更に元魚町一丁目の石井邸へと移った」とあるが、同じ『II』の五七九頁の「年表」では「一八八五年 元魚町仮講義所設立さる。八六年 仮講義所鹿野街道筋へ移転、後に新町に移転。」とある。よく分からない。

一方、『日本聖公会松江基督教会百年史』によると、一八八五年三月にエビントン司祭が来松、白瀉大工町公道館にて「三夜演説会を開き、聴衆立錫の余地なし」とあり、同年一〇月には「エビントン司祭来松、一週間滞在し帰阪。エビントン司祭、米子地方に伝道開始」とある。そして『米子聖ニコラス教会宣教一二五年記念誌』によると、次の記述がある。

〔一八九〇年の項〕◇三月二十七日 エビントン師、富田孫太郎師のもと、最初の洗礼式挙行。受洗者 碧川真澄（検事）、嶺子、次男企救男、豊子、操、五名兄弟 他一四名（米子で最初のキリスト教徒となる）〔略〕二番目の受洗は西村佐司衛兄

なお、この著では、一八九〇年の項に「碧川一家は西町から天神町に住居を移し、家の隣を講義所とする。

その名残のレンガ跡の痕跡は今も天神町に残っている。」とあり、翌年の項には「◇米子に講義所設立。◇四月パークレー・F・バックストーン長老松江に定住。碧川家の子ども達はバックストーン師を敬愛していた。」とある。講義所の設立が九〇年か九一年か不明である。

因みに、『大阪児童福祉の先駆 博愛社の史的研究』（二〇二三、六花出版）中、大月英雄「博愛社の設立と地域社会」論文の中に注目すべき記述がある。創設者小橋勝之助の龍野伝道を契機に、一八九〇年一月に入社した、旧龍野藩士村尾得之の娘のよしが、九一年九月、アイルランド人英語教師J・C・ポーターの伯耆米子での伝道に家政婦として随行しており、同年一〇月以降のよしからの五通の手紙が紹介されていた。「米子町には講義所が一カ所あり、信者は一五、六名で伝道者は二名、求道者は一五、六名いた」。しかしながら、よしは翌年五月には博愛社に戻っている。

一方、『百年史』の九三年の項に「信徒、碧川熊雄氏、船中にて伝道のため来松、米子へ、宍道へと、湖を東へ西へと行く。補助として米子在住の女教師ポーター、西村ひろ子姉（井木久次郎師の姉）の三名を当てる」とあり、ポーターはこの年に未だ米子に在住しているが、その足跡は不明である。二〇二四 九 二二

内坪井町日記

(5)

齊藤 仁昭

(ケバブジョンソン・

元長崎書店勤務)

航空会社では見合わせの便も出ていたところだったが、FDA いいね。でも機体が小さいから揺れが怖い。

FDAの機内誌がなんかニツチで面白いのでいつも持ち帰ってしまふ。フライトは揺れる時もあつたが、さほどでもなく、台風を追い越して無事に小牧空港に着陸。

主催のOさんとメンバーと合流して昼飯。無事に揃つてOさんも喜んでた。メンバーも東京から車での移動だったので、通行止めなどに備えて前日の夜に出発し、なんとか着いたとのこと。特に静岡あたりの雨がひどかつたようで、東京から来る予定だった共演予定の別のバンドは今回はキャンセルとなつてしまった。残念。(2月に再度ブッキング予定)。

もう一組も香川からのメンバーが断念し、別編成にてライブを行うこととなつた。普段集まれていることって、貴重なんだなと再認識。貴重さを噛み締めながら演奏。盛会だった。

九月某日

台風が名古屋と京都の間くらいに停滞している中、京都へ向かう。台風の中を通らないとダメかと思つてたが、さほど風雨も酷くなくすんなり着いてしまった。

知人の喫茶店へ寄り、健康的な食事とコーヒをいただく。

八月某日

台風上陸のため会社が休みとなる。報道ではかなり強烈な台風とのことだったが、熊本はさほどでもなく、買い溜めしていたカップラーメンやおやつを子どもらと食べながらのんびり過ごした。ただかなり長い間雨は降つていた。丸一日は降つたのじゃないかな。

八月末日

台風がとてもゆっくり進むものだから、名古屋行ききの飛行機が飛ぶのかわからない。飛行機はきつと飛ぶ、の方にベットして早朝から熊本空港へ向かう。フジドリームエアラインのカウンターにて「今日の名古屋行きは飛びますか」と問うたら「今のところ飛ぶ予定です」とのこと！他の

き、会場のアバンギルドへ。いい佇まいすぎるお店。食事のメニューもおいしそうだが終わるまでがまん。呼んでくれたのは京都のバンド、旧知のムーズムズ。今回はムーズムズとのツーマンライブ。

彼らの演奏が素晴らしかった。もともとい曲なのだけでなく、楽曲のシンプルな骨組みを三人がそれぞれの見せ場を作りながら今まで以上の複雑だが無駄の全く無いアレンジにて展開していく。全員の演奏力が一段階レベルアップした感じがして、刺激を受けた。

音響さんがとてもいい感じで、我々も頑張った。が、アレンジ力では今回負けた気持ち。励みます。

当日はオープニングからDJをさせてもらった。レコード持っていくのがしんどくて、アイフォーンだけでやってしまったのだが、ライブ後に結構長いこと皆で聴き踊った。ピークはチャゲ&飛鳥の「ウォーク」…。この曲は凄すぎるという話をムーズムズのヤッチ君とできてよかった。しかし何て曲なんだ。異次元という言葉が濫用される現代であるが、異次元をはこの曲のためにある。間違いない。

九月某日

ライブ後は完全に腑抜けで、8月に崩した体調も完全には良くなり、熱を何度が出したりで全然仕事が捗らない。

捗らないのをかなり怒られてしまった。すみません。

九月某日

捗らない仕事の山を片付けていくが、片付けているのか悪化させているのか何が何だかわからない。人はこうしてバンドをやめるのでは無いかと思うが仕事をやめてしまいう。進めている仕事は上手いかなかったら引き際だろうとは思う。

九月某日

国としての倫理の拠り所のなさによる綻びというよりも崩落がどこもかしこも止まらない。

定有堂教室アドレス

@ドラマリア



あなたも私もちりばめられて

三浦 永理

(青翔開智中高教員)

九月の定有堂・ビオトープは、多和田葉子『地球にちりばめられて』を紹介した。多和田葉子は、日本とドイツを往復しながら、表現活動をしている作家で、その言語への眼差しは他の作家にはない独特のものがある。私自身が「多和田葉子」の名前をどこで意識し始めたか忘れてしまったのだが、「心の積読」と思っていた。

今年、五月に東京都現代美術館『翻訳できない わたしの言葉』展を観に行った。その展覧会では、言語に関して5人のアーティストによる言語や言葉にまつわる作品が展示されていた。最後の部屋は、来場者の感想を共有する場となっており、十数冊の本が並べてあり、多和田葉子の作品もあった。その中で、紹介されていたのが、「ダイアレクト」というボードゲームだった。といっても戦うのではない。言語が生まれて、なくなるまでを体感するゲームらしく、プレイするのに三、四時間かかるらしい。言語を生み出す。そんな無茶なことに取り組む主人公が、『地球に

ちりばめられて』のHirukoだ。

ある日突然失われた島国出身のHirukoは、同じ母語を喋る仲間を探しに旅に出る。デンマーク人の言語学者のクヌート、「性の引越し中」のアカツシユと共に、Tanzoなる人物の手がかりを見つけるが、彼は恋人のノラを置いて、消えてしまった。そして、旅を続ける中で、Susanooという人物への手がかりを見つける。この作品で、Hirukoは、「パンスカ」と呼ばれる手作り言語を話す。スカンジナビアのそれぞれの言語を混ぜた設定の「パンスカ」は、Hirukoがクヌートと話す際のぎこちない日本語となって描写されている。ぎこちない言語、学習者の喋り方とも絶妙に違うように描かれている小説は、多和田葉子の言葉遊び的な作品作りが如実に表れている部分でもある。

この作品が、全米図書賞の翻訳小説部門にノミネートされたのも納得だ。この言葉遊びをどう訳すか。翻訳者も頭を捻ったに違いない。英語の翻訳版を見ると、文頭を小文字にしたり、不完全な文にしたりすることで、その拙さを表現している。

そんな違いが「面白い」と思う一方で、作品は、アイデンティティ、文化の盗用、母語話者神話など、それだけで論文が書けそうな内容を問いかけてくる。そして、登場人

物たちは、おしゃべりし続ける。(人によっては、このあたりが鼻につくかもしれない。)それが逆に映像的でもあるような作品で、ヨーロッパの名所と共に、映像として頭に浮かんでくる。

多和田は、Hirikoの人物像が留学にやってきたさまざまな日本人女性からの影響を受けていることを二〇二〇年NHKのインタビューで認めている。

「何か研究したいこととか、ダンスをやっているとか、やりたいことがあって海外に一人で来ている女性って、それはたくましい。(略)キャラクターっていうと、人間に生まれつき人格があるみたいに聞こえますけど、もともと人にはいろいろな可能性があって、それが難民になった時に花開くってことはあるのかもしれない。」

なぜ、この作品が私の目を引いたのかといえば、私も一瞬Hirikoのような状況になったことがあるからかもしれない。と気づいたのは読書会の後だった。大学時代に、ヨーロッパに行きたいとトルコに交換留学をした。当時は二〇一四年。東日本大震災から三、四年たった時期を、異国で過ごすことになった。その上、ヨーロッパの日本観というのは少し歪で、寿司は知っていても、MARUTOは知っていても、日本でGreen Teaが砂糖なしで出てくることも知ら

ないし、地図上の位置もよくわからないし、日中韓の歴史的な緊張関係もよくわからない。Fukushimaのことしかニュースにはならない。私を確実に包んでいたあの国は本当に存在するのか、どこか不安に思ったことがあった。

それは、ドイツに暮らして、2011以降の日本を見ていた多和田にとっては、より深い実感が伴う危機感だっただろう。『献灯使』では、恐らく震災などの天災によって閉じられた国である日本の内側からその姿を描いている。こちらは、全米図書賞の翻訳小説部門で最優秀賞になった。一方で、『地球にちりばめられて』に連なる三部作は、それを外側から描いている。そして、とめないおしゃべりはいつまでも続くかのように、未来に開かれている。

私には、この作品自体を「なるほど、面白かった」ですませたくない気持ちはどこかにある。紹介文にもあるように、「誰もが移民になりうる時代」の小説だ。母語話者の世界に入るために外国語を学ぶことを移民に求められる時代は、終わろうとしているのか。世界は再び国境によって閉じられるのか。その変化に、我々島国の住人は追いつけるのか。

そして、「移民の時代」は終わるのだろうか。

いも(くり)なんきん

あきの素生

(くうねるめがね)



毎年恒例となつてきた厳しい残暑に、九月が終わるといふ感覚を狂わされている。一度は、最高気温が三十度を切り、暑さ寒さも彼岸まで、を実証するような週間天気予報に胸を撫で下ろしたが、いつの間にか連日三十度超えの予報に変わつていてげんなりした。

そんな中でも、朝晩は少し涼しい日が増えた。エアコン無しで過ごせるとちょっとうれしい。ごく控えめに、おすおすと、秋が近付いて来ている。

スーパ―に並ぶ顔ぶれも変わつてきた。とうもろこしが消え、梨が存在感を増している。きのこが安い。ゴーヤに伸ばしていた手で、かぼちやを選ぶ。

秋になると、ほっくりとしたものが食べたくなる。加えて甘ければ、それに越したことはない。仕事帰りに、お風呂上がり、ガリガリ食べられるシャーベット系アイスや

しゅわしゅわ飲料を欲していたのに、濃厚なバニラアイスやラムレーズンアイスが食べたくなるのも、同じ原理だろうか。

話がそれた。ほっくり甘い秋の味覚といえは、いもくりなんきん。子どもの頃は、好きな天ぷら第一位はさつまいもだった。甘くてほくほくしているからだ。同じ理由から、かぼちやもかなり上位だった。このふたつは秋と言わず年中スーパ―で手に入るので、天ぷらのときは毎回のようにお目見えした。大人になるにつれて、れんこんやいんげん豆、ピーマン、ゴーヤなどに好みが変わり、さつまいもやかぼちやを天ぷらでいただくことがぐんと減った。ほくほくという食感が、飲み込みにくいにつながつて、お酒ではつるつると流れないというのも、理由のひとつかもしれない。たまにお店で出てくると、やっぱりおいしいな、と感じるのだが。

かぼちやを炊くのは難しい。奇跡的にほっくり仕上がったとしても、それを再現できない。生のかぼちやを切るときの、絶対包丁をすべらせてはいけないという緊張感を減らすため、最近では、かぼちやをラップでくるみ、あらかじめレンジで温めてから切るようにしている。この方法を取り入れたとき、かつてなく自分好みに炊けたので、間を

おかず、かぼちゃをもうひとつ買ってきて、同じ手順で調理したところ、水分たっぷり炊き上がり、意気消沈した。以来、うまくいったりいかなかったり、安定してほっくりかぼちゃを食べることができない。かぼちゃの種類や原産地によって食感等が異なるとも聞き、慰められているが、好みの炊き具合になったときには、うれしくなっただけなくばかりで、種類や原産地を確認しないので、いつまでも理想のかぼちゃを探し求めている。

さつまいもは、人生で最初に収穫した農作物だと思う。幼稚園の芋掘りは、アルバムの中の写真がその体験を教えてくれるばかりで、ほとんど記憶がない。でもきつと、葉っぱがわさわさついているつるを掴んでひっぱって、お芋がたくさんついている、途中でつるが切れた、大きいお芋がとれたよ、などと言いながら、土まみれになってみんなでお芋掘りをしたんだらうな、と想像する。芋掘りを題材にした絵本も多いため、そちらで追体験している部分もあるだろう。

「石焼き芋、焼き立て」。あの独特のフレーズを、最近とんと聞かない。夜、あの音が聞こえはじめると、なんだかわくわくしたものだ。外に買いに出ることはなかったが、

その分想像がふくらんで、憧れが募った。大人になり、昼間にお店の石焼き芋を買って食べる機会もある。黄色くトロけるような味わいで、とてもおいしい。ただ、あのわくわくした気持ちは、買いに行けなかった焼き芋にだけ感じられるものなのだろう。

まだ焚き火が大らかに行われていた頃、一度だけ母が焚き火で焼き芋をしてくれた。芋はアルミホイルに包んで、焚火の中に入れていたのだったか。さぞかしおいしかっただろうと思うが、枯葉を集め、焚火の準備をしている母の姿だけ、強く心に残っている。

最近では、さつまいもは「レンジでチン」だけで食べることが多い。余計なものはいらない、といえば聞こえはいいが、自分の場合、ただ横着なだけとも言える。きのこと一緒にみそ汁の具にするのも好みだ。

いつ本格的に始まるとも知れぬ秋、食べる楽しみへの期待は尽きない。

「それから定有堂」

その五

白井明大さんのこと

奈良 敏行

(定有堂)



白井さんは定有堂閉店情報を、いち早くネットに速報した人だ。注文取り寄せ停止を告げる掲示を目に留め、「閉店」と告知した。実際はその一ヶ月後が閉店だったのだが、告知の仕方はもの静かなものだった。余韻がこころに残った。

五月(二〇二四)刊行の『ヘリヤ記 I 《声たち》』という文庫大の作品を先日献本してくれた。ファンタジーとっていいのだろうか。不思議な感触の物語で数回読み返した。同時に他の著作十数冊にも目を通した。詩集・歳時記・エッセイ・絵本だった。憲法を詩に翻訳したものであった。

『ヘリヤ記』はタルコフスキーの映画『ストーカー』を思い起こさせた。少年が「ゾーン」に分け入り帰ってくる

話なのだ。なぜ何度も読み返したかという点、世界観中心の物語だからだ。記号着地することの少ない物語造形だ。そのわからなさがこち良い。少年アムナハウスは「人為的災害の負の遺産」とともに閉ざされた「ヘリヤ」地域に暮らす。朱染めのロープで囲われたゾーンの中で、禍々しさを放出する「石」の回収をナリワイとする。禍々しさを封じ込めて消え去らない残土は「浮遊する空気」を放出する。さざ波のように空間を歪ませて現れるこの「空気」と触れ合うとき、アムナリウスだけはさざやきを耳にとらえる。そのさざやきが『声たち』なのだ。物語は始まったばかりで、このゾーンがどんな「希望」をもたらずかはまだわからない。

白井さんの作品の中でわたしのこころに一番残ったのは、沖繩から山陰に移り住んでからの詩集の中の一行だ。(『着雪する小葉となつて』)

《後悔はないの、てさぎなみに訊かれた》

この「て」と切れてつながるのは白井さんの独特の呼吸だ。反復して出現する。沖繩へ移り住んでいた頃、自分の二十代を振り返ったエッセイの本もある。タイトルがとても魅力的だ。『希望はいつも当たり前言葉で語られる』。内容をタイトルに圧縮したこの表現は詩的でもある。「どんな仕事でも手を抜かずやっついていれば、きっと誰かが見

ていてくれる」「頼まれたことは、やる。頼まれなかったことも、やる」「簡単なことがいちばん難しい」言葉はだんだん詩的なものに昇華されていく。「やさしい言葉が心を縫う ようやく息をそっとつける」。

白井さんはそんな風に生きて、そしてわたしの前に現れた。本屋ではもちろん白井さんの本を扱っていた。コーナーも作っていた。でも「遅れて読む」わたしだったので、すべてに目を通したのは今回が初めてだった。きちんと読もうと思ったのは、ぬぐいがたく離れない言葉と出合っただった。

《生きようと生きるほうへ》

これは思潮社刊行の本のタイトルでもあるし、「生きる」という詩の末尾でもある。記号着地しないこの言葉が、わたしにとつての《声たち》との出会いだった。

《人のいのちが暮らしの記憶と名といまを持って

生き続ける先で 交わり 生まれ 変わりながら

幸せになってと願う》

《でもきつと

いまいるここから

生きようと生きるほうへ》

白井さんは詩人であるとともに『日本の七十二候を楽しむ』などの歳時記の作家でもある。「いのち」と「暮らし」

が「ヘリヤ」では失われつつある自然を惜しむように、ここに膨大に書きたてる。なぜ旧暦を慈しむ仕事をしたのか不思議だったが、裏返しの場所に「ゾーン」がある事を知って腑に落ちるものがあった。

《ひとつひとつ花の名まえを調べて覚えていった。そのときそれが、ぼくにとつて心からの迷いの余地なく綴(つづ)れる、言葉だった。花の名を覚え、書くことは、詩を書くこととほとんど同じ感覚だった。》

「生きようと生きるほうへ」、この「ことば」が、触れ合ってわたしに届いた《声たち》だった。

024.07.23

白井明大さんの著作から

『ヘリヤ記 I 《声たち》』 詩之友社 2024

『着雪する小葉となって』 思潮社 2021

『希望はいつも当たり前前の言葉で語られる』 草思社

キキねこ



ドラメリア (座敷わらし)

ききねこの話をしよう。

ききねこ。ネコのキキちゃんではない。利き酒ならぬ「利き猫」だ。

自宅の猫たちが音もなく近寄ってくるとき。座椅子の背もたれに登り肩に前足を掛けて、あるいは消灯後の部屋でやわらかい鼻先を押しつけて。そんなときは振り返ったり呼びかけたりせずひとしきり撫でて、指の感触だけを頼りにどちらの猫か当てる。それを「利き猫」と呼んでいた。

ピンと尖った耳から頬にかけての線。首周りの毛並みの感触。二匹はどちらも日本猫の雑種で体格もほとんど変わらない。ヒントの少ないクイズだった。十五年以上共に暮らす飼い主たる者に手触りだけで完璧に判別できたと言えたら格好良いのだが、正答率は五分五分、良くて六割といったところ。「これはあんずでしょ！」と自信満々に振り返ると、違うんだけどなーと言いたげに上目遣いでエア鳴きするちいがいたり。

そのちい(本名はちいこと言う)をこの夏見送った。

この家の猫が自分だけになってしまったことに気づいてい
るのかどうなのか、あんずは寂しげな素振りを見せない。
急に姿を消した仲間を呼んで探し回るような行動もない。
さっぱりしたものだ。ニンゲンを独占しやすくなったから
か甘えてくることが増えたが、そもそもこちららが当てる必
要がなくなったわけで、利き猫は事実上終了。

でも、もし。あんずとは別に、そつと体をすり寄せてく
る気配を感じたら。伸ばした手に、馴染んだすすすべの毛
並みが触れたら。きつと嬉しくなつて名前を呼ぶだろう。
そうしたら、かわいいあの子はきつとあの澄んだ声でニャ
アと応えてくれるのだ。



・編集後記:

某講演会のスライドにトラブルがあり、二十分前に一枚一枚ス
クショで貼り直す羽目に。ギリギリすぎていろいろ震えました。

ドラメリア (編集長)

定有堂書店の四十三年の思い出を反芻しますか? と聞かれる。
じつは何度か勤め何度か辞めた時の「何者でもない」谷間の記憶
の方が、また「ここにいる」という強度の強い実感を呼び起こす
そこが「ほんとう」の反復の場所だ。

奈良敏行 (発行人)